Osaka University Knowledge Archive

Title	第3回 日本語日本文化教育センター教育研修会 報告
Author(s)	
Citation	大阪大学日本語日本文化教育センター授業研究. 2008, 6, p. 57-58
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/5089
rights	本文データはCiNiiから複製したものである
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

第３回　日本語日本文化教育センター教育研修会　報告

実施概要

日時　　2007年９月15日（土）10：50～12：20
場所　　日本語日本文化教育センター棟１階　CJLC多目的ホール
参加対象者　　本センター専任教員・非常勤講師

プログラム
講演・ワークショップ
　題目：異文化ワークショップ－「気づき」から見えてくるもの－
　講師：徳井厚子先生（信州大学教育学部）

講師プロフィール
　徳井厚子（とくいあつこ）
　大阪外国語大学大学院外国語学研究科日本語学専攻修了
　北京大学文教専科（1988－89年）、北京日本学研究センター派遣専門家（2004年）などを歴任、1990年より信州大学勤務
　現在、信州大学教育学部准教授（国際理解教育分野担当）
　主な著書：『多文化共生のコミュニケーション』（アルク、単著）
　　『日本語教師の「衣」再考』（くろしお出版、単著）
　　『対人関係構築のためのコミュニケーション入門』（ひつじ書房、共著）

【講演・ワークショップ要旨】

異文化ワークショップ－「気づき」から見えてくるもの－

信州大学　教育学部　徳井　厚子

本ワークショップでは、「気づきから見えてくるもの」というタイトルで、異文化トレーニングを中心に行なった。

多文化共生とは、「自己を知り、他者と関係を構築していくダイナミックなプロセス」（徳井2007）と定義できる。これは多文化共生自体を固定的な完成したものとして捉えるのではなく、ダイナミックで変容しつつあるプロセスとして捉えている。

また、「異文化理解」という言葉もよく使われるが、他者や異質なものを理解するという意味として捉えられがちである。しかし、他者を理解する前にまず自己を理解するということが大切ではないかと考える。その意味でも自己への理解と気づきは必要であろう。

「理解」という言葉を、われわれはよく使うが、人はそう簡単には理解できない存在である。なぜ誤解が生まれるのか、なぜ理解できないと思うのかについて自己を問い直していく必要があろう。

そこで、本ワークショップでは、「自己への気づき」をテーマに、異文化トレーニングという方法を用いた。「学習」と言う場合、「認知的側面」のみを重視する場合が多いが、異文化トレーニングでは、感情的側面、行動的側面、認知的側面の三側面の学びを目指している。

本ワークショップでは、具体的には以下の2つについて行なった。

1　誤解はどこから生まれるか

Back to Back という異文化トレーニングを通じてなぜ誤解が生まれるのか誤解のプロセスを体験した。具体的な手法は、ペアになり、お互いに見せずにそれぞれ絵を描き、それぞれ描いた絵について、相手に見せずに言葉だけで伝えて絵を描いてもらう、というものである。やりとりの相互作用を通じて、相手に言葉だけで伝え理解してもらうことの難しさを体験することが目的である。ふりかえりの過程で、知覚や説明の仕方に包括的に捉え、全体をつながりのあるものとして捉えるアナログ型と分析的に捉えるデジタル型があり、どのような説明の仕方をするかによって誤解を生じてしまうということもふりかえった。

2　誤解とどう向き合うか

誤解や衝突の場面が生じた時、人はどのような状況に陥るのであろうか。どのような行動をおこし、どのような感情を抱きがちなのだろうか。

異文化トレーニング「バルーンバ文化をさぐれ」（八代ほか1998）を通し、異文化接触場面に遭遇した時の自己の行動、感情についてどのような気づきがあるかについて体験を行なった。これは未知の文化との出会いを体験し、その体験を通じて異文化接触の状況の中での行動や心情について、体験と自己の内省を通して学ぶものである。

トレーニングの結果、ホスト側であるマジョリティの意識とマイノリティであるニューカマー側の意識が、異文化接触状況においてギャップがあり、そのギャップについてはそれぞれがあまり意識していなかったことがふりかえりとして出された。このような状況は留学生教育においても日常的に体験していることではないかと考えられるが、そのことについて意識化していくことも今回の目的の一つであった。

参考文献

八代京子ほか1998『異文化トレーニング』三修社

徳井厚子　2007『日本語教師の「衣」再考-多文化共生への課題』くろしお出版